

方向

第一四三号 一九九二年四月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人・大塚五朗 (三四) 1991.2.10 原田憲雄

晩年

一九四五年 五朗、四十八歳。勤務先、住所、同じ。松子、四十七歳。朗、二十五歳。喜子、二十一歳。樹、十七歳。哲、十四歳。迪子、十一歳。洋子、四歳。

三月、哲、御室国民学校を卒業し、四月、京都府立京都第三中学校に入学。

八月、敗戦。

十月、朗、復員帰郷。

十二月二十日、『隨筆 京都風土記』第三版発行。

一九四六年 五朗、四十九歳。勤務先、住所、同じ。松子、四十八歳。朗、二十六歳。喜子、二十二歳。樹、十八歳。哲、十五歳。迪子、十二歳。洋子、五歳。

一月二十日、『続京都風土記』再版発行(三版奥付による)。

四月二十日、同第三版発行(〃)。

一冊舎同人では、大塚朗のほか、杉田荘作が前年、この年には赤谷明海・原田憲雄などが復員帰郷したが、先

生が療養しつつも勤務が繁多であり、他の同行は戦後の混乱のなかでそれぞれ生計を維持するのがやっとで、歌会を開き、回覧雑誌を維持することは困難であった。

一九四七年 五朗、五十歳。勤務先、住所、同じ。松子、四十九歳。朗、二十七歳。喜子、二十三歳。樹、十九歳。哲、十六歳。迪子、十三歳。洋子、六歳。

三月、樹、京都府立京都第三中学校卒業。

五月二十三日、五朗先生逝去。法名、石松庵素心日朗居士。二十五日、葬儀。

日はおぼえていないが、嵯峨野高等女学校で先生追悼の会が開かれ、客の立場で岩見護先生、森永義一先生、それに原田憲雄が追悼の言葉をのべた。

この前後に、喜子は三和銀行に、樹は東京ガスに就職。八月、朗は恩師である京大の佐々木申二教授の推薦で、千葉県夷隅郡上瀑村（現在の大多喜町上瀑）の相生工業株式会社に就職する。

一九四九年七月十七日、家族全員、京都から相生工業の社宅に移転する。

その後しばらくして、五朗先生の遺骨は、大塚家の墓のある長野県埴科郡松代町蓮乗寺に埋葬された。

一九六七年一月一日、遺歌集『日蝕の庭』を京都の方向社から刊行。B6、一二〇頁。岩見宏と原田憲雄が編集にあたった。「昭和二十一年初夏」の日付のある著者の「後記」がある。編集者の「附記」にいう。

『日蝕の庭』は、大塚五朗先生が、第二歌集としてみずから編集浄写しておかれたものを、印刷に附した。

……「後記」の終りに近い「旅」の字の下の＊印は、このあと四百二十字詰原稿一枚分が欠けていることを

示す。先生逝去の後、某出版社が複写した際に失われたように記憶するが、確かではない。この集に収める歌の大部分は歌誌『水鏡』に、一部は先生が主宰された一艸舎の雑誌『艸』その他の新聞・雑誌に発表された。この集にもれたもの的一部は、『続京都風土記』に収められる。したがって第一歌集『山原』と『続京都風土記』と本集とで、先生の歌作の大体をうかがうことができよう。……（昭和四十一年九月）
奥付の主要項目。

日蝕の庭 歌集 にっしょくのにな／頒価四三〇円 送料七〇円／著者 大塚五朗／発行者 横浜市保土谷区岩崎町九四平林方 大塚松子／印刷者 株式会社栄文堂印刷所水上徳太郎

この発行頒布には多くの人々の示教・協力を得たが、特に京都府立京都第三中学校・京都府立嵯峨野高等女学校の同窓会と水鏡京都支社の方々の心こもる支援を得たことを銘記しておきたい。

一九七六年九月九日、新書版『京都風土記』が光村推古書院から刊行された。同書院の案内の葉書にいう。

大塚五朗 京都風土記 新書版 総二六八頁 定価 七八〇円

昭和十七年に発行し幻の名著とさえいわれてきた本書をこの度装いを新たに再び世におくります。著者は旧京都三中、嵯峨野高校で教鞭を執り早逝した多感な歌人、その才能と人となりを慕う多くの人々の間で起こった静かなブームが本書の再刊を実現しました。……

大塚松子夫人の「あとがき」

信州では若葉にはまだ早い五月の初めに、私と長男夫婦は松代市にある主人の墓に参りに行ってきました。

／今年は亡くなって三十年になります。六人の子供達は東京に横浜にいずれも元気に暮らし、あの頃はまだ幼なかつた末娘まで社会人として働いている現在、かつての苦勞もただ思い出として話し合える今日で、墓まいりも楽しい行事のひとつとなっています。／帰ってみましたら、思いもかけず、光村推古書院の方から、『京都風土記』を再刊したいとお手紙をいただきました。夢のようなお話に、うれしくもまた有り難く、さっそく仏前に報告したことでした。／私どもが初めて京都に参りました当時は、何もかもが関東とは違ふ風俗習慣に不満だらけで暮らしておったはずなのに、日がたつにつれ、すっかり京都が好きになり、あるいは西にあるいは東にと、暇をつくっては尋ね歩いて楽しんでいました。遂にはここに永住しよう、籍も移そう、とまで言い出す有様でした。ことに嵯峨野には心を惹かれて足しげく訪ねておりました。……

本書は、『隨筆 京都風土記』の表記を改め、記事のいくらかを取捨し、浅野喜市氏の新しい写真をふんだんに入れて編集しなおしたもので、『(京の本) フルール双書一六』、発行者は京都市中京区麩屋町通二条上ル光村推古書院本田欽三、印刷所は明文舎印刷株式会社。

以上の本稿に収めえなかつた先生の短歌、ならびに長歌一首を、以下に掲載する。数字は『日蝕の庭』の頁数。『日蝕の庭』以外は、そのむね注記する。

家毎に雨戸を閉(とぎ)す音きこゆや降りうとくなれる夕雨

三

はなひりて身のさびしくも竹林(ちくりん)の竹の下道(したみち)わがゆきにけり(嵯峨の竹やぶ) 三

二尊院出でて下れば吹く風の細々として茶の花の道 二〇四

昼の酒のみつつわれのひとりなり硝子にうつる冬の樹の影 二三

高々と石垣つみて大原や人は閑(しづ)かに家居せるなり(大原にて) 二〇

朝は晴れて昼間は曇る冬の日の日ぐせとなりて山の閑(しづ)けさ 二四

桃山の裾べにつづく真竹やぶ冬の時雨の音たてて降る 二〇

あたたかく日のさす庭に児等のゐて縄とび遊ぶ見ればしづけき 二〇

丹波路ゆ伐りて流せる筏木(いかだぎ)の水無月川に浮きてただよふ 二五

雨あがる空のあかりのしんとして紫こもる桐の樹の花 二〇

谷むかふの青葉の山に灯(ひ)がともりいよいよ鳴きのしげし河鹿は 二〇

秋をすでに寒けく住める丹波人(たにはびと)庭の日向にをしね刈り乾す 二〇

山深くしづかに池はあるものか天渡(あまわた)る雲の影をうつして(葛蒲谷池) 二六

丹波嶺ゆここに流れて音すめる清滝川は水やせにけり 二〇

まなかひの青杉山にたつ畑さびしき末は路になびかふ 二〇

谷間(たにあひ)のとほしき家に人住みて襦袢(むつき)かけ乾す庭の日向に 二〇

疲れゐて見るにまぶしき梅の花やぶかけはすこし風ある日なり

雨あとの光つめたく通ひ来て身に近くたつ春の籠（大和月瀬遊草五首）

雨あとのけぶらふ谷に鳥のゐて鳴けばいよいよ晴るる朝空

花あまた咲けとも花のさびしきは春浅き山の白梅の花

漸くに空は来れば山の梅いよさびしく籠（かがや）かんとす

山川の春は瀬だちのゆゆしさよひねもす聴きて山越すわれは

花桐の紫あはしあめつちの寂（しづ）かなるみれば夏は来向かふ（吉野村二首）

一羽二羽降りたちて驚のあはれなり水照（みで）りあまねき沼の葦原

相模の海久里（くり）の浜べは夏たけてかぢめ刈り乾す浜のかぎりを（相州久里浜二首）

ひとり来て心すべなしかぢめ乾す夕べの浜に砂踏むわれは

三日月の空にかかりてさびしけれど父母（ちちはは）の国に汽車は入りゆく（信濃路の旅五首）

物言はぬ友と対ひ居てうら安し一夜寝に來し山のいでゆに

雪やみて浅き月夜となりにけり広野（ひろの）のはての山もさびしく

瓦焼く烟は青し夕まけて木曾より美濃に越ゆる山峽（やまかひ）

この旅も終りと思ふしばらくを子に土産など買ひ整へぬ

昼を鳴く虫をあはれと夏草の峠の道に汗ふきにけり（石山幻住庵跡四首）

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

夏照りのどこかに雷が鳴りてゐつ褐色の麦の穂そよぎもせぬ

芭蕉翁幻住庵跡の石碑（いしぶみ）におきたる影は椎の樹のかげ

あけくれの寂しき時は庭に出て君も見ましけむ三上山（みかみやま）あはれ

高山の麓に住めばさにづらふ乙女も山に朝草を刈る（伊吹山三首）

秋口のけさの嵐に吹き靡く薄は白し霧にぬれながら

昼たけて日光（ひかげ）とどかぬ谷の道あけほの草の花は真白し

出雲人の言葉はかなしほのほのと湖（うみ）の白魚を売りに来る人（出雲松江にて二首）

荒山（あちやま）の幾重の山の雪積みて湖（うみ）をかこめば湖（うみ）の明るさ

谷あれば家、家あれば必ず人住めりこの生（よ）のこのかくはさびしき（甲州路三首）

八つの峯（を）の八つの峯ごとに日は照りて胖（ゆた）にしづかに山は据（すわ）れり

高原をわがゆきし時天（あま）とびて山鳩は音に鳴きたちにけり

ふかぶかと夕日かげもつ寺の庭重衡（しげひら）供養の塔は小さき（木津安福寺三首）

おびただしく飛べる羽虫を手にはらひ供養の文字を佇（た）ちてわが読む

裏やぶに風たちそめしを聞きあしがこの谷間（たにあひ）はやがて曇りぬ

天渡（あめわた）る雲もひそけし相寄りて親しき者を今焼かんとす（姪三七子死去三首）

寂しくてこの世死なせし人の骨（こつ）たなぞこに持ちて山下るわれは

四

〃

〃

〃

四

〃

〃

〃

望

〃

〃

究

吾

〃

五

〃

さ庭べに蘇芳の花のひそけさよ人を死なせて今かへり来ぬ

枕べに小鳥をあまた鳴かせめて寂しと遂にいはざりし君（手塚幸吉を悼む二首）

天つ日はいゆきかへれどら若く逝きにし君はまた見ざるべし

三日月の空をゆきつつさやるなし君が新妻（にひづま）まきてぬる宵（甥三八雄結婚）

おくつきの山の松原音にたちて吹けば朝夕のさびしかるべし（井上勇君長逝）

久にして相見し人に隔てなく話しかけられて心あはてぬ（歌会席上、安田青風氏）

まだ碌（ろく）に物も言へざる稚子（をさなご）の遊ばんとするこゑの愛（かな）しさ

しらじらと寒さは午後及びみて花瓶の菊の咲き定まりぬ

厚みなき雲の一ひら二ひらが離れて寒き夕比叡となる

日の暮れと物の音さへ鎮みつつ青き空より雪こぼれ来ぬ

よべの雨いつ止みたりし霧だちてけさはしづけき山々の雪

今宵またいたくも冷えむ光（て）る雲の夕べは山に寄りいそぎつつ

にはひ頭（た）つものゝ気配の動きあつけさしらじらと雪おける庭

夕やけの寂しき時に比叡かけてひとつらの鳥の渡りゆく見ゆ

竹やぶに鳥鳴くきけばさぶしらの日は大空を渡り終へたる

雪保（も）ちてひと日ありしが愛宕嶺の夕べは雲の寄りてやすらふ

若

天

〃

〃

〃

六

七

七

〃

〃

六

〃

〃

〃

七

〃

昼の月ぼっかり一つあるゆゑに懐にしみて冷ゆる山の氣

裏山に霧のくづる音はして張りかへられし障子の白さ

花咲かぬ樹にて枯れたるさびしさをむしろすがしといひて嘆かふ(樋口功氏死去二首)

夜の道に躓きつつも思はへばこの道もやがてうとくなるべし

鶯の鳴きしをいひてこの朝の叙情的なる食卓に寄る

長かりしひと日思へばかく坐して畳の上にあるも寂しき

硬き椅子に身を倚(よ)せて寒しここに来ていくたりの人か生命(いのち)生きたる(診療所にて)

おのが名を呼ばるる待ちて時久し日のさす方に身をうつしつ

大空を渡り終へたるしばらくも明かる日がありて寂しともなく

遂に誰も来ぬ一日が暮れんとすひととき比叡の夕焼けがして

霜降りし告げて驚く子のこゑをまなぶた寒くわれは聞きをり

人の生(よ)の一代(ひとよ)といふもはかなさのただ穂(おだ)しきを願(ね)ぎて過ぎつる

三箇夜餅睦みめさすといふラジオ聞きつつ今宵よき月夜なり(照宮御成婚)

いつまでもラジオかけある家ありて夏の夜空の星も冷え来ぬ

生命(いのち)冥(くら)くわがかけ坐る日に近く咲きてはや紅(あか)し山茶花の花

生命(いのち)冥(くら)くわがかけ坐る日に近く咲きてはや紅(あか)し山茶花の花

二二六

〃

〃

〃

二二五

〃

〃

〃

二二四

〃

二二三

一〇〇

〃

一〇九

九七

九七

あらしめし日々の懈怠(へきたい)の後にして寒けき秋の空となり来つ

一一六

衰へし思惟に親しむ或る宵のこほろぎのこゑはつちに沁みつつ

日の暮と物の静けきこゑはして帰へらねばならぬ子のおそきかな

いづこにか風が落葉を吹く音のありて夕べをはるる冬山

続風土 二六七

長歌

物かげと 庭は寒きに み冬べと 空は冷ゆるに ほのりほのり あかりともして 藪柑子 紅き実の 紅
くはあれど つぶらみの つぶらにあれど しくしくに 心にふれて かなしかりけり 生(な)る季(と
き)の さびしければか そがいのち せつなければか かにかくに あはれなりけり 朝を来て 時雨は
ぬらせ 夕べ来て 雲は呀ゆれ いやさやに 明(あか)るその実を ほけほけと 見惚(ほ)け立ちつつ
しみじみと 心(うら)泣きつつも 思ほへば そのさびしさの われにかも似る 続風土 二五〇

以上で「歌人・大塚五朗」の稿を終る。遺漏すくなからぬことを恐れるが、すべて、後賢の訂正に待ちたい。先生のご遺族をはじめ、多くの方々から示教・激励いただいたことを、ここに厚く感謝いたします。

※前号正誤 第一四一号 一頁四行 衣笠国民学校 ↓ 大將軍国民学校

第一四二号 一七頁二〇行 対しは ↓ 対しては 二〇頁末行 ないあさった ↓ ないあわさった

三人の詩人から近著詩集をいただいた。原田昌雄氏の『十四行詩』（毎毎舎）、比留間一成氏の『閉ざされた野の唄』（土曜美術社）、長沼静人氏の『海は山は』（耕人社）である。

原田氏は一九八〇年の第一詩集『誘引』以来、脚韻を踏む詩を作り続けていて、このたびのは第三集。

月 みちて ちる 水に 花びら

haab-IRA

葉の 光り ふる 野末の 紫苑

shi-ON

思出 うかぶ 魄 しづむ 魂

k-ON

橋の たもとを うすものと 綺羅

k-IRA

韻の踏み具合を示すと右のようなことになる。いうまでもなく大文字の部分が韻を踏んだところである。中村真一郎氏のマチネ・ポエチック以後中絶していた押韻を復活し、上げ潮の機運を導いた努力には敬意を表したい。ただ、わたし自身は、日本語の詩の脚韻をそろえることには、あまり大きな効果を期待しないほうなので、氏にとっては張り合いない読者であろう。氏は韻法についての理論・歴史に詳しく、押韻にとまなうさまさま

の障害にも精通しているはずである。わたしの疑問や危惧をあらためて持ち出すまでもあるまい。氏の試みる押韻は多様だが、韻を踏む都合であろうか、各句の末は名詞止めが多い。道の行き先に杭がうってあるようで、読みすすんでそこで気分が止まってしまう。漢詩や欧米の詩は、意味で切れても、韻が踏んであることによって音が流通し、気分が繋がるのだが。「詩はことばのあはれにてこゝろのあやをいひとむるなり」と扉にするす。氏のこころのあやが、そのことばにあはれにさきみちる日をまちたい。

『閉ざされた野の唄』は二部にわかれ、Iは「諷」、IIは「感傷」。それにつき「あとがき」にいう。

十五年余にわたる作品はまとめようにもまとまらない。白楽天が詩集編纂にあたって、諷論、閑適、閑居、感傷に分類したことを思い出し、それに倣うことにし……「諷論」と「感傷」とに分けた。さらに諷論の論が格（ガラ）でもないので「諷」、とのみにした。……「諷」は最近のもの。このような作品を書かせるのは世の中が悪いからだ。生涯、酒と恋の詩だけを書きたかったのだが。

「諷」の五篇のうち一篇は天皇の輸血、三篇は戦争、一篇は望ましい未来を題材とする。「酒と恋の詩だけを書きたかった」詩人がこんな詩を書かずにいられない心情には共感せざるをえない。ところでこの集の読後の感想を愚直に述べれば、Iよりも、IIの、たとえば、

歯医者に行くのです／まだ時間があります／青島で生まれたのです／長い行列をつくって／持てるだけ持っ

て歩きました／＼不意に友人の顔が浮かんだ／彼も小学校四年時 青島だといった／死んでまだ生温かい弟を背負って歩いたと／ごぼごぼと庭の湧き水が呼びかける／年齢をとると松も樺も形になります／人間はどうでしょう／若い連れを媒体にしてことばが降りかかる／硝子戸の向う 朱塗りの太鼓橋を／過去の影が渦を巻いて流れていく／急に雲が切れて明るくなった／コーヒーが冷めますとすすめて／その人は歯医者へ去った／入口の果物店のレモンが光る

のほろに篤い諷論が感ぜられ、Iにもどると、かえって感傷がいちじるしい。比留間氏は中国の詩、ことに白楽天にくわしく、分類を誤るはずはない。おそらく諷論に内在する批評の矛盾が素直にここに出ているのだ。物事に鋭く感じ深く傷むたましいが、痛めつけられるものへの同悲共感から呻き出して詩となった批評形式が諷論なのだ。だから感傷から出発しない諷論はない。しかし切りつけた対象から流れる以上の血を批評者自身が流さなければ諷論とはならないものらしい。白氏の新楽府はそのような諷論をめざして九世紀初頭の旗手となった。けれども新楽府は権力闘争の賛美や女性蔑視をふくみ、その賛美と蔑視はかれの批評の脆弱に由来し、諷論を内面からつき崩す。諷論は両刃のやいばのように、矛盾を本質とし、目指せば逸脱し、避けたところに流露するといふ、やっかいな、達成するに困難な詩である。この集では「感傷」のあるものにおいてほどは、「諷」の諸篇では、諷論に成功しなかったのではないか。困難を厭わずに立ち向かう氏の勇氣にはうたれるけれども。

『海は山は』は、長沼氏の第九詩集で、前著『掃心をめぐる風と唄』からは十余年たっている。この期間に書きためたものを『書き下ろし「長編詩」』のように改めて組み直し一卷にしたものだ、という。富士正晴氏の紹介でときどき手紙を交すようになったが、まだ逢ったこともない友人のひとりで、詩、歌、俳句、川柳の集をもらい、そのたびに遠慮もなしに不満ばかりを述べたて、それでも憎まれないのは、氏が余程の大人だからである。スマートさとお喋りが、やや過度だ、というのが、わたしの好みにおもねった言い分である。氏は若い頃から文筆にも書法にも稚拙さなど、みじんもなかった。句集『笈舎抄』で見事な老年を吟じたのは、先に別稿でいった。このたびのはなんども読み返しているのだが、肝心の『書き下ろし』としての視点からの感想がまとまらない。ここには「霧」一篇を引く。イエーツだったかエリオットだったかがほめていた「乾いた叙情」は、こういう詩をいうのであろうか、と思うからだ。

詩はほかでもない／手で蠅を打つことだ／逃げおくれ死んだ蠅／首尾よく死にそこねてもがく蠅／一行毎に／かけがえのない体験を飾りかけ／ほくを切りすてる／骨だけになった言葉／手であると同時に蠅でもあるもの／として生まれるのだ 詩は／だが待てよ と君がいう／詩はつまるところ青く白く／城跡にきえる霧なのさ／それなら 落城の／悲劇などもってまわるまい／骨だとか 手やら蠅やら／比喩がうるさいし 退屈なんだ／もっとやわらかに 霧のように／もっと面白く／おどけて欲しいよ／詩は――と。

天神さんへ梅を見に行つて、うぐいす笛を買つた。小指ほどの竹筒に、吹き口が突き出している。筒は両端とも抜けているが、細い吹口の根もとに穴があけてあり、その辺りに細工があつて音が出る。筒の両端を指で閉閉しながら吹くと。ウグイスのさえずりを真似ることが出来る。ケキヨケキヨ・ホーホケキヨと鳴らしていると、娘が笑つて「お母さんは笛が好きね」と言つた。娘が小さかつた頃、遊びに連れて出て、いろいろな笛を買つたのを思い出す。うぐいす笛も買ったことがあるが、水笛はいくつも買った。鳥の形をしていたり、動物の形をしているのもあるけれど音は変わらない。子どもは、家に帰つてから、ヒュルヒュルヒュル、ヒヨヒヨヒヨと水を撒きながら熱心に吹いた。土産物にはその土地らしい笛があつて、くじらやふぐの形の笛、鹿の形の笛などもあるがどれもピーとかブーと鳴つて、音に特徴はない。猟師の使う鹿笛というものは、鹿の角に穴をあけて、蛙の皮を張つてあるのだという。どんな音が出るのだろうか。

わたし達が子どもの頃には、いろいろな草を吹いた。タンポポの茎やネギなどは太さによつて音が変わるので、何本も一度に吹いてみたりした。木の葉を巻いて吹くのはツバキの若葉が一ばんよかつた。ハマグリを食べた後には、びったり合ら殻を捜し出してその三角形の頂点にあたるところを、石やコンクリートの平面に擦つて穴をあける。そこを口に入れて、ウーと声を立てると、声の振動で貝殻がピーと響くような音を出す。殻に穴をあける時に、強く擦りすぎると割れたり、穴が大きくなって、響きが悪くなるので、ていねいに、時々ためしてみ

ながらよく響くように擦る。こういうのをいくつも作って大切にしていた。殻の質がよくて、艶があり、上手に調整できたものほどよいのである。子どもの頃は遊ぶことにほとんど時間を使っていたのだけれど、なかなか苦心もあつたからか、遊んでいるとは思っていなかった。そのように考えるなら、今でも遊んでいるようなものかもしれない。

二月の末に伊賀上野市へ行って「くひな笛」を買ってきた。近鉄電車の上野市駅前には、芭蕉の大きな像が立っている。そこからすぐ近くの城跡にある上野公園には芭蕉記念館があつて、芭蕉や門人の俳画や遺愛の木の根の蛙などが展示してあつた。記念館から少し離れた所には、茸のような形の俳聖殿も建っている。中に伊賀焼の芭蕉の座像が祀つてある。公園を出て、町の中には養虫庵がもとの形のまま保存されているし、芭蕉の生家もほぼ古い形で残されているので、当時を想像することはできる。その台所の古い道具と一緒に、戸棚の中に並べてあつた「くひな笛」は、現在、紅梅屋慶則というお菓子屋さんが製作している。そういうお菓子もあつたらしいが、それには気がつかず、掌に乗るくらいの小さな丸い壺のような陶笛を買つた。灰色の何ともいえない温かい形をしている。芭蕉が旅の慰みに湖畔などでこれを吹いたのだろうか。壺の口に息を吹き込むとホーホーというような柔らかい音が出る。土の質や厚み、大きさなどで、微妙に音が違うだろうと思う。同じような陶笛で、オカリナという楽器がある。さつまいものような形をしていて、表と裏に穴が十余りあけてあり、これを指で押さえて吹くと曲を演奏することができる。わたしは笛が好きだから、これが欲しくて長いこと迷つた末にととうとう手に入れた。思ったより難しく、上手に吹けないまま押入の奥に忘れられているけれど、その陶笛は量感があつ

てどっしりと重く、土のぬくもりは何とも言えない。

「くひな笛」は楽器といえるようなものではなくて、クイナの鳴く声を真似るだけの笛である。その説明書の「くひな笛の記」によると、

水鶏鳴くと人のいへばや佐屋泊り 芭蕉

旅をする芭蕉さんが頭陀袋に入れていつも持ち歩いた「くひな笛」は古代の楽器「天の土笛」に似た小粒の陶笛です。小孔に口をあてて軽く吹くと、くひなが鳴くようにとつとつとした音色を出すことからその名があります。

と書かれている。そして、この笛を芭蕉は門人の松野配力にやったが、その後、服部土芳に譲られ、さらに川口竹人にわたって、竹人はこれを秘蔵し愛玩した。竹人という人は、「芭蕉翁全伝」を書いているが、この笛の由来を書き、

水鶏笛 銘霊極 陶器也 径り一寸三分 重さ十二匁一分

と記しているという。明治維新のとき、川口家から、芭蕉の仕えた藤堂家に献上されたが、関東大震災のときに所在が分からなくなった。

わたしが買ってきた「くひな笛」を計ってみたら、径は一寸五分、重さは十八匁ほどあったから、芭蕉の持っていたものより、少し大きいかもしれない。この陶笛は、吹き方によって、いろいろな音が出るけれど、本当のクイナはどんな声で鳴くのだろうか、日本野鳥の会の図鑑には、

クイナは繁殖期にはピューピューという声を連続して発する。ほかにいろいろの声を出す。

ヒクイナは繁殖期にはキョツ、キョツ、キョツキョツキョツキョキヨ、警戒する時はケレケレケレと鋭く鳴く。

とあり、学研の図鑑には、

クイナは冬になるとやってきて、クツクツまたはキュツキュツと鳴く。

ヒクイナは春になるとクイナと入れかわってやってきて、初夏の頃にキョツ、キョツ、キョツと鳴く。その声がちょうど戸をたたく音に似ているので、ククいな戸をたたく音々としてよく知られている。

と説明されている。「くひな笛」を息の強さや吹き込む角度を変えてみると、図鑑の説明にあるような音が出るように思うけれど、ほんとうにクイナを聞いたことがないので、ウグイス笛のようにその声を真似られない。クイナの鳴き声をはっきり知りたいものだと思ってあれこれ調べてみた。山本俊太郎編、昭和二十二年改造社発行の歳時記に、次のようなことが書いてある。

水鶏（くひな）水辺の鳥。数種あれど叩くと詠はるるは緋水鶏なり。緋水鶏は六月頃交尾期に際し、雌はカタカタと連続して聞こゆる可憐の鳴音を発す。夕より朝にかけて聞くこと多し。春渡来して、初夏の頃水辺の叢等に巣を営み、繁殖して秋去る鳥なり。川辺・湖沼・水田等に居り、容易に飛翔せざれども、走ること早し。

歳時記の夏の部に入っているのはヒクイナだということがわかる。芭蕉の「くひな笛」では、カタカタという

音は出せない。なお同じ歳時記に、

水鶏笛 これを吹きて水鶏を誘致するなり。呼笛と答笛とあり。径四分、長さ一寸八分ばかりの竹孔を穿つ。

「ピヨウピヨウピヨウピヨッピヨッピヨッ」と吹きつづけて一息休み、更に前より少し長く吹きつづく。答笛は「クルクルクルクル」と吹く。五月より七月迄の間、朝夕に吹く。獵者は此二笛を携へをれり。

これを読んで、近くの銃砲店のウインドーに鴨のおとりや獵に使う笛の並んでいたのを思い出した。電話をしてクイナ笛というものがあるのかたずねてみた。獵にはキジ笛の他は禁止されていないのでどれを使ってもよいけれど、クイナはめったにいないのでクイナ笛というようなものはないとのことだった。琵琶湖の回りは開発が進み、新しい橋が何本もかけられて自動車の往来が激しい。水上スキーやモーターボートが走りまわり、水辺の葦は保全条例を定めて守らなければならなくなっている。クイナがいるはずはないと気がついた。芭蕉は天津の門人の宅に泊って、

この宿は水鶏も知らぬとぼそかな
と詠んでいる。

クイナは飛ぶ力が弱く捕えられやすいので、数が少なくなり、今では保護鳥になっていると言う。その肉は極めて美味、というのだから何と言えはよいのかと思う。現在、ヤンバルクイナは絶滅しそうだし、硫黄列島にいたマミジロクイナは一九一一年頃、すでに絶滅したということである。他にもこんな例がある。

ハワイ諸島の最西北端の小島、レイサン島に、全長十五センチばかりの小さな飛翔力を失ったレイサンクイナ

がすんでいた。十九世紀の末頃にこの島に人間が住むようになり、彼らがウサギを連れてきて島に放した。ウサギは島の植物をほとんど食べつくしてしまい、住家を失ったレイサンクイナは遂に一羽も見当たらなくなってしまった。しかしレイサンクイナはこの島の西北数百キロの小島ミッドウェイにすんでいたもので、この鳥を輸入して元のようにしようと試みられたがすべて失敗に終わった。第二次世界大戦中（一九四二年か翌年の初め）偶然の機会にネズミが、島に接岸した船からミッドウェイに上陸した。ネズミは島で急速に増えて、レイサンクイナはこの多数のネズミに卵や雛を食べられ、一九四三年十一月に採集された標本を最後に地球上から姿を消した。また、ミッドウェイから西南西へ二千キロの海中にウエーク島という小島がある。この島にも、ほとんど飛力を失ったウエーククイナがすんでいた。この鳥はこの島にただ一種の陸鳥で、第二次世界大戦前にはかなり多かつたといわれている。一九四二年、日本軍がこの島を占領し、大鳥島と名付けて守備隊を駐留させた。戦争末期に食料補給を断られた日本軍がこの鳥をみんな食べてしまい、一九四五年に戦争が終って、日本軍が引き揚げた後にはウエーククイナは一度も見られていない。こうしてこの鳥も地上から姿を消した。（清本昌紀『変わりゆく動物界』）

このように環境の変化に対応する力の弱い種類の生物が、次々と地球上から姿を消すことは想像できるが、そこに人間が大きく関与していることに気がつきにくいのではないだろうか。

動物園には、以前に比べて鳥類が多くなっている。カモ、サギ、ツル、キジ、ワシ、フクロウ、インコ等はその仲間が多く集められているし、コウノトリ、フラミンゴ、ハクチョウ、ヤツガシラ、ペリカン、エボシドリ、

ダチョウ、エミユウ、レア、ホロホロチョウ、ペンギンなどは天然記念物のような保護鳥で、国際親善の使者もいる。草の中を走りまわっているウズラもいる。動物園に鳥が多くなったということはそれだけ鳥が普通に見られなくなり標本のようになってきたということなのだろう。

どうにかしてクイナの声を聞きたいと思って、N T Tのテレフォンサービスも何度か聞いてみた。京都や歌山など幾つかの局で野鳥の声を聞かせてくれる。どの局も四九七九、七九七九、など鳴くという音に合わせた番号になっていて、半月くらいで鳥の種類が変わる。アカゲラ、コヨシキリ、ホオジロ、ツグミ、ウソ、オオルリ、アオアシタビなどの声を聞いた。鳥の声というのは、人間の持ち合わせている音や文字で、とうてい表わすことはできない。何度聞いても、わたしにはその真似はできないし表記することもできない。ホオジロは、昔は「一筆啓上仕候」と鳴いたが、今では「サッポロライメンミソライメン」と鳴くとテレフォンサービスでは言っていたけれど、どんなに気をつけて聞いても、わたしにはそんなふうに聞こえない。

レコード店に行ってみると、NHKから「四季に鳴く」というCDがシリーズで出ていた。どれにもクイナは入っていない。とりたてて美声ではないからなのだろうか。「日本の野鳥ベスト10」というのを一枚買った。ウグイス、オオルリ、コマドリ、クロツグミ、キビタキ、カクコウ、ルリビタキ、コヨシキリ、ノビタキ、ノゴマ、これだけがベストテンである。ほんとうに美しい、鋭く透明でまたやさしい。じっと聞いていると眠くなってくる。鎮静作用があるのかもしれない。

鳥の発声は人間のように声帯によるのではなくて、気管の最下部の二つの気管支に分岐するところに鳴管とい

う骨の箱のようなものがあって、その内部に震動膜が張られ、気管を空気が出入りする度にこの膜が振動して声が出る。この振動膜に筋肉がついていて、その引っ張り方によって音の調子が変わってくるのだそうである。しかも空気が出るときも入るときも音が出るし、鳴管は気管から気管支に移る分岐点で左右一対になっているから、同時に二音を発することができるといふ。鳥の声を聞いて、それを音や文字に表わすことが如何にむづかしいかということがわかる。

鴨川には毎年ユリカモメがたくさん来る。今年の三月七日には研究グループの人が、呼び笛とまき餌で呼び寄せて、無双網という仕掛け網で十一羽を捕獲し、体重や体長を測った後、足に標識をつけて、再び大空に放したと新聞に出ていた。どんな呼び笛を使うのか聞いてみたかっと思ふ。鳥の鳴管を考えれば、笛を吹くことがその声を真似るには、最もよい方法かも知れない。

伊賀上野市で買った陶笛を時々出して、工夫して吹いてみる。これがクイナの声に似ているかも知れないぞと思つて何となく満足する。でも芭蕉はこの「くひな笛」を吹いただろうか、吹かなかったのではないだろうか、門人が拾ってきた木の椽根の蛙などを大事にしていた人だから、やはり吹いたであろう。クイナの句は、今そこにクイナがいなくても詠むことはできる。でもクイナがすべて地球上からいなくなったら、クイナが鳴くという句は詠めない。言葉はすべて自然に支えられてあるものだから、自然が疲れてしまえば言葉も衰える。

水鶏鳴くと人のいへばや佐屋泊まり

は、芭蕉最後の旅となった元禄七年五月の句で、山本健吉『芭蕉』によれば、伊勢境に近い尾張領海部郡の佐

屋に赴き、山田庄右衛門亭に泊ってこの句を発句とする半歌仙を巻いた。水鶏が鳴くから聞きに行こうと誘われたという意味だが、もちろんこういう理由は芭蕉がこの句の中で仮構したものであろう、ということである。芭蕉は佐屋に五日間泊まったそうだけれど、大変疲れていて、半歌仙しか巻けず、あとは門人達が詠み継いで満尾したそうである。この旅の途中で、江戸にいた寿貞の死を聞き、そのまま旅をつづけて、同じ年の十月に大阪で亡くなっている。旅も人の死も哀しさも、大きな自然と一体であったように感じる。先日ある講演会で、

海暮れて鴨の声ほのかに白し

を挙げて、「組みかえることによって、自然は無限です」ということを聞いた。自然が変われば言葉も変わる、言葉が新しい自然を発見することもある。いずれにしても生き生きとした元氣な自然であってほしい。自然破壊が言われてずいぶんなるのに、漠然とした意識しかなくて、タンカーの沈没や湾岸戦争による油の流出で、海の生物がたくさん死ぬことを心配したけれど、クイナの何種類かが地球上から消えたというようなことは、考えてもみなかった。恐竜やマンモスが滅びたのと同じように、生物が消えるのは仕方のないことで、人類もいつか滅びるのだろうとしか思っていなかった。もっと現在、わたしたちのすぐ近くで絶滅していく生物のあることを理解していなかった。深泥池にカイツブリが少なくなったと聞く。今年はまだ庭にメジロが来ない。平野神社へ行けば椿のみつを吸っているだろうと思っっているが、それも心もとない。言葉だけが空をただよって、実体がなくなっていることにさえ、気がつかなかったということにならないように、目や耳や心をよく働かせたい。自分も自然の中の一片であることを忘れずにいたい。